

筆跡とパーソナリティの多面的対比

高野 孔司 久野 雅樹

電気通信大学大学院情報理工学研究科

1. はじめに

手書きの文字を見たときに、書いた人のパーソナリティについて想像することがある。特に東アジアの漢字文化圏では、書かれた文字から人柄を読み取ってきたようなところがある（「書は人なり」とも言う）。素朴な印象としても、神経質そうな字があれば、おおらかな雰囲気のある字もある。もちろん、こうした筆跡が与える印象とその人のパーソナリティは必ずしも明確に対応しているわけではない。神経質そうな字を書く人が、実はおおらかな人であるということもしばしばあるだろう。しかし、全体的な傾向として見たとき、文字の特徴と、書字行動の主体のパーソナリティがなんらかの関連をもつことは十分に考えられる。

近年の日本で、文字の個性評価に関して、社会的な関心を集めているものとして、筆跡鑑定と筆跡診断がある。筆跡鑑定は裁判でも参照されるが、時に複数の鑑定が一致しないケースがあり、個人と筆跡を対照させることの難しさがうかがえる。一方、筆跡診断では2つの団体があるが、どちらも根拠となる研究を客観的な形で公表していないので、疑似科学の印象を与える部分がある。

日本でも実験に基づく筆跡の科学的研究はあるが、質量ともに十分と言える状況ではない。その理由として2つのことが考えられる。ひとつは、日本では筆跡を、研究の対象としてよりも、書道などの芸術の対象として考える傾向が強いことである。もうひとつは、欧米のアルファベットがたかだか数十であるのに対し、日本では漢字、ひらがな、カタカナが対象であるため、研究対象が膨大かつ複雑すぎることである。

なお欧米では筆跡学 (graphology) という学問領域がある。これはフランスのミッシェン(1871)の研究から始まる伝統のあるもので、特にフランスでは筆跡診断士という国家資格も存在するが、普遍的な科学として成立しているかどうかという点、これも判然としないところがある。

以上のような状況から、筆跡に関する実証的な研究は、内外を問わず、不十分な状況にあり、それが日本では著しいと言える。本研究では、現代日本人における漢字の筆跡とパーソナリティとの

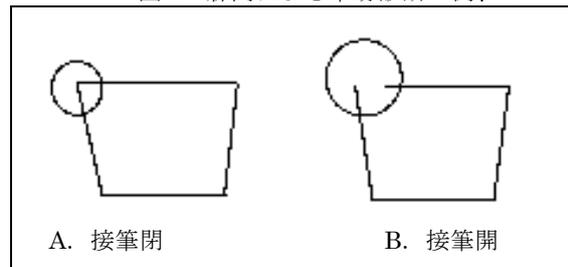
関連を取り上げ、多様なパーソナリティテスト（古典的なMMPI、今日、標準的なパーソナリティ理論である5因子モデルに基づくFFPQ等）を利用しつつ、実証的な分析を行なうことを目的とする。

2. 関連研究

2-1. 筆跡診断

今日、一般に行われている筆跡診断について、森岡(1999) [5]を例に挙げる。

図1 森岡による筆跡診断の例、口



Aは「接筆閉」と言う。こういった書き方は、小学生が黒板に書いて教えてもらったものであり、これを今も守って書いているなら、最初に習ったことをきちんと守る人であり、社会のルールに沿った行動をし、誠実、几帳面、真面目な人としている。

Bは「接筆開」と言う。学生から社会人への過程で融通性や協調性を身につけていき、「口」の字も曖昧な文字へと変化する。上も下も大きく開いている人はずぼらでルーズな要素が非常に強いとしている。

以上のようなことから、

- ・接筆閉は、誠実、几帳面、真面目
- ・接筆開は、融通性・協調性がある、ずぼら、ルーズ

と言っているのだが、実証的な根拠は示していない。

2-2. 実証的研究

筆跡のイメージとパーソナリティとの対応づけについての一連の実験心理学的研究がある。

ここでは槇田(1982) [4]の研究を取り上げる。

まず刺激（筆跡）を選択するところからスタートし、実験そのものは、第1実験から第6実験まで行っており、その手順はおおよそ次のようなものである。

- ・回答者（文字筆記者）の気質をクレッチマーの3類型に分類する
- ・回答者の筆跡を他の実験協力者に評価させる
- ・気質ごとに各因子の得点を算出する

クレッチマーの3類型は分裂気質、循環気質、粘着気質である（表1）。筆跡を評価する際には、「大きい、筆圧が強い、明るい、無気力など」の28項目を用いている。これを「丁寧さ」「大きさ」「筆圧」「形」の因子の観点でまとめたものが表2である。

表1 クレッチマーの類型論

分裂気質…非社会的、内気、きまじめ、変わり者
循環気質…社会的、親切
粘着気質…几帳面、凝り性、融通がきかない

表2 気質ごとの筆跡の特徴（槇田による）

因子 気質	丁寧さ	大きさ 勢い	筆圧 力強さ	形
分裂気質	汚い	小	弱	くずれている
循環気質	汚い	中	中	丸い
粘着気質	きれい	大	強	四角い

3. 実験1：関連研究の筆跡評価との対照

目的：筆跡を筆跡診断の手続きに沿って評価して得られる解釈と、複数のパーソナリティテストで得られる筆記者のパーソナリティとの関連を検討する。

方法：データとして、男子学生115人に書いてもらった筆跡と、各人に回答してもらったMMPI(ミネソタ多面人格目録)、FFPQ(5因子性格検査)、価値志向性尺度等のパーソナリティテストを使用する。

根本(2005)[6]と森岡(1999)[5]を参考にし、現在行なわれている筆跡診断の分類方法(表3)と槇田(1997)の因子(表2)を用いて、漢字10字を3段階もしくは5段階で主観的に区分した。対象とした漢字は、筆跡診断でよく使われるもので、「口」「日」「子」「木」「京」「言」「私」「中」「様」「大」である。

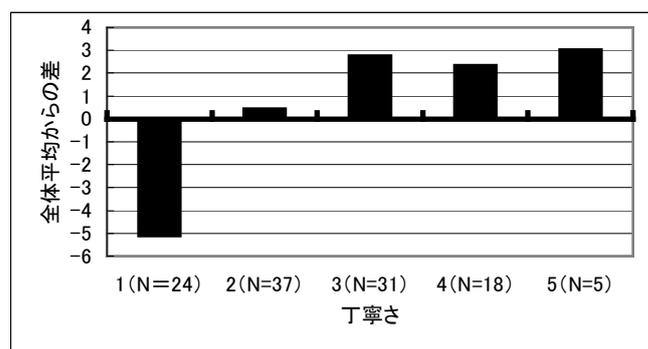
筆跡の分類と、MMPIの尺度・項目、FFPQの特性の偏差値、価値志向性の尺度とを対照させ、筆跡にパーソナリティの特徴が現れていないかを調べた。

表3 分類の観点

分類に用いた観点	
口	線がきっちり閉じているのか
日	2画目の角が丸いのか角ばるのか
子	ハネが強いのか弱いのか
木	左右どちらの払いが長いのか
京	口の部分が大きいのか小さいのか
言	横の線が等間隔か非等間隔なのか
私	全体の縦と横のどちらが長いのか
中	横の線が左右どちらに傾いているのか
様	へんとつくりの間が離れているのか狭いのか
大	横線の上の縦線が出ているのか出ていないのか

結果：筆跡診断の解釈や槇田の研究を明確に支持する結果とはならなかったが、一部、それらと整合的な結果も得られた。槇田の主張と一致する結果の例として、FFPQの「統制性」の下位尺度「几帳面」が挙げられる。この尺度は得点が高い人は、物事を几帳面に行ない、きちんと秩序づけていき、低い人は、大まかで整理整頓が苦手であるとされている。図2に示すように、字が「丁寧」である人ほど「几帳面」の得点が全体平均よりも高く「汚い」ほど得点が低い結果になった。確かに、字が丁寧である人ほど几帳面という素朴なイメージとあう。だが、「几帳面」と「丁寧」の相関(.249, $p<.05$)は、有意とはいえ、弱いものととどまる。

図2 「几帳面」得点と字の丁寧さとの関連



考察：パーソナリティと主観的に評価した筆跡特徴との対応ははっきりしないものだった。先行研究と整合する結果も一部に認められたが、その説明力は弱いものであった。

丁寧さや筆圧などを分類するときの客観的な基準を作るのは困難であり、主観を用いた評価・

区分で科学的に筆跡とパーソナリティの関係性を証明するのは難しいことが示された。

4. 実験 2：筆跡の計量的特徴との対比

目的：丁寧さや筆圧などを評価する基準を作るのは困難だが、文字の各部分、構成要素のサイズや傾き等の、計量的な指標は、比較的容易に求めることができる。手書き文字をスキャンし、計量に基づく客観的な手続きで得られる指標と、パーソナリティとの関連を検討する。

方法：筆跡とパーソナリティのデータは実験 1 で用いたものと同じものを使用した。

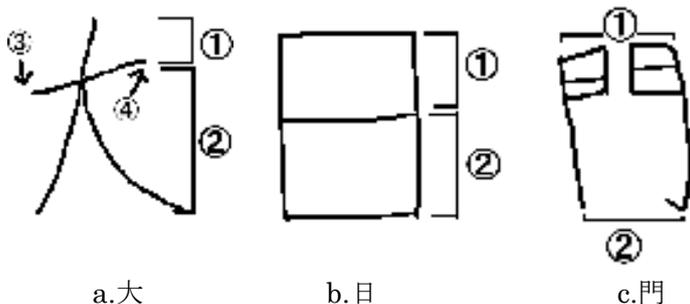
筆跡の計量には、2つの方法を用いた。1つ目はプログラムを用いてスキャンした画像の解析を行ない計測する方法、2つ目は画像計測用のソフトを用いて計測する方法である。プログラムを用いた測定のみでは、測定困難な文字が生じてしまうため画像計測ソフトを用いて判別できない文字を補うように測定した。

プログラムのツールには Borland C++ Compiler を使い、画像計測ソフトには“P!0_0! Excel「長さ・面積測定」”を用いた。

測定した文字は、“大”“日”“門”の3文字である。この文字を選んだ理由は、計測がしやすい、基準が設けやすい、いくつかの観点で測定可能である、という3点である。

3文字の計測方法について説明する。

図 3 測定の位置



まず“大”である。根本[6]は、図 3-a①の部分を出させるほど、リーダー気質であると述べている。さらにこの①の割合が全体に対して、3分の1以上であればリーダー気質、4分の1以下であれば協調型、4分の1以上3分の1以下であれば中間型という分類に分けることができるとしている。そこで、①の長さを全体(①+②)と比べ、どの程度の割合なのかを計測した。

また、森岡[5]は、“中”の横棒を右上がり

くほど、積極性があると述べている。これを“大”に応用し、図 3-a③、④を用いて“大”の横棒がどの程度傾いているのかを計測した。

さらに、横の長さ

- ・ ①の突出割合
- ・ 横棒の傾き
- ・ 面積

次に“日”である。根本[6]は、“言”の横棒を等間隔に書いている人であればあるほど、物事を論理的に考える傾向があると述べている。これを“日”に応用し、図 3-bの①と②をどの程度の割合で書いているのかを計測する。

また、“日”についても縦と横の長さを測定し、おおよその面積について計測した。

森岡[5]は、“日”の右上の部分が、丸まっているのか、角ばっているのかという観点でも分類できるとしている。主観ではこの分類も可能だったが、計量的に行なうには、判断基準の設定が難しいため、本実験では行なわないこととした。よって“日”の計測は以下の2点になる。

- ・ 横棒の間隔
- ・ 面積

最後に“門”だが、森岡[5]は、図 3-c②の幅が①に比べて広がっている場合には、おおらかな人である傾向があると述べている。このことから、②が①に比べてどれだけ広がっているのかを測定した。

また、この文字についても前述の2つの文字と同じようにおおよその面積を計測した。まとめると計測点は以下の2点になる。

- ・ ②の開き具合
- ・ 面積

結果：まず、3文字それぞれについて面積(大きさ)を計測している

ので、相互の相関を調べた結果、やや高い相関(.525~.589, $p < .01$)が得られた。同じ人が同じときに書いても、文字によって大きさは変わってくる部分があると考えられるが、それを超えて、文字の大きさ自体が個性を反映することを示していると考えられる。

以下に筆跡の計量指標と、FFPQ、価値志向性の尺度との相関で有意であったものを挙げる。

- まず、“大”である
- “大”の突出割合と「信頼」：.212($p < .05$)
- “大”の突出割合と「奔放」：.209($p < .05$)
- “大”の面積と「協調」：.269($p < .01$)

“日”には、相関が有意なものなかった。

- 最後に“門”との相関を挙げる。
- “門”の面積と「宗教的志向性」：.233($p < .05$)、
- “門”の面積と「権力的志向性」：.242($p < .05$)

“門”の面積と「外向性」：.201($p < .05$)

“門”の面積と「支配」：.230($p < .05$)

“門”の面積と「敏感」：.207($p < .05$)

“門”の面積と「奔放」：.220($p < .05$)

“門”の面積と「規律性」：.202($p < .05$)

MMPIは質問項目数550(3段階)で構成されている。この質問項目と筆跡の計量指標についても相関を出した。ここでは、1%水準で有意になった対についてのみ報告する。

“大”“門”の面積と「人の辛抱を越える程一事によくこだわる」という質問項目にやや弱い相関(.303)がみられた。また、“門”の面積と「547.高い所にいると、飛び降りたくなる」という質問に.414のやや高い相関があった。

“大”の横棒の傾きと「時々盗みや万引きをこらえきれなくなる」に相関(.427)があった。

“大”の突出割合と「大抵いつも腹がすいている感じがする」に-.325の負の相関があった。

“日”の横棒の間隔と「時どき、悪霊にとりつかれる」に.378の相関があった。

“門”の下部の開き具合と、「父母は私には無理な事もさせようとした」に.302、「連日眠らずOKと思う元気すぎる時あった」に.313の相関がそれぞれあった。

考察：得られた相関はほとんど弱いものであり、計量的に測定した筆跡特徴とパーソナリティとの対応ははっきりしないものだった。

“大”の突出割合は大きいほどリーダー気質であると述べられていたが、実際に相関が見られたものは「信頼」、「奔放」であり、「信頼」はリーダー気質と対応しているように思えるが、相関は弱いものであった。また「統制性」といったリーダー気質に対応していると見られるものとの間に相関は見られなかった。さらに、横棒が右斜めであるほど活動的であるとされていたが、相関が有意なものはなく、活動性に関連する「外向性」などとの関係性も特に認められなかった。

“日”の横棒の間隔が等間隔であるほど論理的に考える傾向があるとされていたが、有意な相関は見られず、論理性に対応する「理論的志向性」にも相関はなかった。

“門”の下部の開き具合は開いているほど、おおらかな傾向であるとされていたが、対応すると考えられる「情動性」を含めて、相関が認められるものはなかった。

面積に対応するのは表2の大きさであり、表を見ると大きいほどパーソナリティが几帳面、凝り性、融通がきかない等の傾向があると考えられる。面積と一番相関が高かったのは「協調」であった。それに続いて「権力的志向性」や「支配」等であった。しかし、相関は弱く、相関が見られた特性

相互に一貫性が欠けている。

筆跡の指標と、MMPIの質問項目との間に、様々な相関が観察されたが、これらも全体として、整合的に理解できるものとは言いがたい状況にある。たとえば、“大”の横棒の傾きと、盗みや万引きへの衝動を直接的に関連付けて解釈するのは、実際的ではない。

以上のように、筆跡の計量指標と、パーソナリティの尺度得点、項目得点の関連を検討したが、総じて、その関連は、見られたとしても弱いものだった。その関係性が強く出ているものを認められなかった。

5. おわりに

本研究では筆跡とパーソナリティの関係性を多面的に調査した。一部に、従来の主張とあう結果、直感的な印象と整合する結果が得られたが、筆跡とパーソナリティの関連性(それがあってもないにせよ)の全体像を描くには不十分な段階にあると言える。これは、筆跡を評価、計量する基準、パーソナリティを数値化する基準、双方について、現段階では曖昧さがあることによる。今後は、特に前者、つまり筆跡の計量化の手法に工夫を加えつつ、研究を改善してゆきたい。

参考文献

- [1]井上誠喜・林正樹・三谷公二・八木伸行・中須英輔・奥井誠人 1999 C言語で学ぶ実践画像処理 オーム社
- [2]FFPQ研究会 2002 改訂 FFPQ (5因子性格検査) マニュアル 北大路書房
- [3]黒田正典 1980 書の心理 筆跡心理学の発達と課題 誠信書房
- [4]槇田仁 1982 SCT 筆跡による性格の診断表出行動についての基礎研究 金子書房
- [5]森岡恒船 1999 ホントの性格が筆跡でわかる 旬報社
- [6]根本寛 2005 こわいほど当たる筆跡診断 廣済堂出版
- [7]日本 MMPI 研究会 1969 日本版 MMPI ハンドブック 三京房
- [8]酒井恵子・久野雅樹 1997 価値志向的精神作用尺度の作成 教育心理学研究, 45(4), 388-395.
- [9]詫摩武俊・鈴木乙史・瀧本孝雄・松井豊 2003 性格心理学への招待 サイエンス社
- [10]安居院猛・長尾智晴 2000 C言語による画像処理入門 昭晃堂